

## 長崎方言の終助詞タイの変遷について：近世近代の 長崎史料を中心に

前田，桂子  
長崎大学教育学部：教授

<https://doi.org/10.15017/4783567>

---

出版情報：語文研究. 130/131, pp.501-484, 2021-06-02. 九州大学国語国文学会  
バージョン：  
権利関係：

# 長崎方言の終助詞タイの変遷について

— 近世近代の長崎史料を中心に —

前 田 桂 子

## 1 はじめに

長崎の代表的な方言の一つに終助詞タイがある。例えば、

○あなたに似とるってことたい。 (吉田修一『長崎乱楽坂』)

は、「あなたに似ているということよ」という意味であるが、『日本国語大辞典第二版』でもタイは、方言の助詞として、「文の終わりに付けて、軽く念を押す意を添える。よ。さ。」と説明され、使用地域は長崎以外にも福岡県、佐賀県、熊本県、大分県、宮崎県と、九州で広く使用されるようである。しかしこの語の成立過程についてはまだ解明されているとは言い難い。筆者は先に方言終助詞バイの成立とそのバリエーションの使い分けについて考察した。タイはバイとの類似点が指摘される終助詞である。そこで本稿でも、バイに続き、長崎における方言終助詞タイのバリエーションの推移と用法の棲み分けを考察するとともに、その成立について説明を試みる。調査方法は近世以降の文献とアンケートおよび聞き取り調査である。以下、近世の長崎方言資料は長崎史料と呼ぶことにし、引用箇所には適宜下線を施す。なお本稿では、用例を採集する際、ダイも含めた。ダイは長崎では推量ウの後に現れる終助詞で、音韻的には異なるが、タイとほぼ同様の意味を表すことがその理由である。

## 2 長崎におけるタイの意味とバリエーション

現代の長崎における意味用法の確認のために『長崎県方言辞典』を参照すると、

たい タイはバイとともに肥筑方言（福岡・佐賀・長崎・熊本）に行われる文末辞。バイの親近感にくらべ、タイには話者が、それが当然だと考えている気持ちを感じさせる語気があるので、時に尊大な感じを与えるところがある。「俺にくれんじゃった罰タイ」「どげん抵抗も無駄タイ」対馬—上対馬。壱岐。壱岐—郷ノ浦。五島。福江市。五島—小値賀・岐宿。平戸市中野。北松浦—鷹島・福島・鹿町・吉井・小佐々。長崎市。西彼杵—野母崎・多良見。諫早市・島原全半島。

と記され、使用域は県全体に渡り、バイと比較して語気の強い語であることがわかる。さらに時代を遡って1924年の『長崎市史風俗編下巻』を参照すると、以下のように、タイのバリエーション形が、タヨ、タナン、タナ、タノ、タンなどいくつも存在し、細かい使い分けがあることが見て取れる。

○ タイ (一) ゴまたはヨの如く語尾に用ひらるるのである。ゴ。ヨ。(二) 疑問語尾に用ひらる。

東京言葉の「タネ」にあたる。元来ゾエ(ゾヤ)と同一の言葉であらう。

…(中略)…

アラ、ホンナコテ、ヨカヤツタイ。あれは本<sup>マフ</sup>統に美人よ。(中略)  
ワタシャ、ジツワ、ソングンコタ、チットモキエテ、オラントタイ。私は、実は、そんなことは、一向、聞いてゐないのですよ。

タイは琉球語の du ya に似てゐる。そして「ぞへ」、「ぞや」、「ぞい」などと同じ意味を有してゐる。zoye.zoye.zoi. tai. 琉球語 du ya.

タヨ 元来「ぞよ」と同一の言葉であらう。

モ一、ナカンチャ、ヨカタヨ。もう泣かなくてもよいぞよ。

タナン ぞや(ぞへ、ぞい)あなた。タイの意味を強めたのである。

zoya (zoya zoi) +anata (anta) =tanan.

タナ タナンと同じ tanan.tana. 対等以下の者にして親みあるものに対して用ふ。父母が子供に対し姉が弟妹に対して用ふるやうなものである。

ソー、ハラカカンチャ、ヨカタナ。そんなに立腹しなくてもよいではないか。あんた。

ソー、ツメテ、シゴトバ、センチャヨカタナ。そんなに。つめて、仕事しなくてもよい。

タノ タナと同一の意味を有す tana.tano. (一) 対等の者に対して用ふ。(二) 親みある長上の者に対して用ふ。

キヨーワ、タイソー、オモシロカッタ、タノ。今日は大変オモシロカッタのですよ。

タン タナと同一の意味を有す。Tanan tana tan 対等以下の者、身分低き者に対して用ふ。

ソー、シンバイ、センチャ、ヨカタン。さう心配せんでもよいぞへ。

(古賀十二郎1924『長崎市史風俗編下巻』長崎方言集覧 (p.102))

### 3 方言タイの時代別概観

ここでは、長崎方言タイとそのバリエーションを時代別に見ていきたい。以

下、近世期、明治期、昭和・平成期の3つの時代に分け、それぞれ〈語形〉・用例（共通語訳）・その他（話者・『作品名』・年代など）を記述する。なお、参考までに近世期に佐賀で出版された滑稽本の方言の用例として、3.1.2佐賀史料の例を挙げた。

### 3.1 近世期

#### 3.1.1 長崎史料

以下、長崎史料の例を挙げる。先に述べたように、長崎史料とは、長崎人の言葉が描かれた近世の文献という意味で用いている。従って、作者が長崎人以外のものも含む。タイの初例は確認できた限りでは1796年成立の日中語対照の会話書『訳詞長短話』の例であった。しかし、それ以前にタンの形が1718年の『博多小女郎波枕』に見られたことが興味を引く。これについては後述する。化政期にはタナも確認できた。

〈タイ〉・モウヨロシウゴザリマスタイ（いいじゃないですか）

（『訳詞長短話』1796年）

・すらごとたいだちもね ううばんげなもんたい

（うそだ…ばかばかしいことだ）（『長崎訛』化政期頃）

・長崎の人「コリヤよかたい。…芸能やらしゃつたらよかたい。…」

（これはいいよ。…芸能をなさつたらいいじゃないの）（『東海道中膝栗毛』1814年）

〈タン〉・そがいにせでも大事なかたん。（問題ないじゃないか）

（『博多小女郎波枕』1718年）

〈タナ〉・あんげんこんげん いはんばつてん よかたな（いいじゃないか）

（『長崎訛』化政期頃）

#### 3.1.2 佐賀史料（参考）

佐賀史料として、案間坊暮成の『滑稽洒落一寸見た夢物語』（1867）と、同じく幕末の戯作者一返舎十九の『伊勢道中不案内記』を参照した。作者はいずれも佐賀の人である。同時期の長崎史料とは若干語形が異なるが、意味用法面からタイと同根と思われるタア、タン、テエ、ダア、デエの例が見られた。

〈タア〉・手の先とつらばかりうどん粉どん付たもんタア（つけたものだよ）

（佐賀の人・『一寸見た夢物語』）

・おともア川上の桜馬場くらひの事ちやろふと思ふとた。（思うんだよ）

（銀作・『伊勢道中不案内記』）

- ・わさんの事ばかりいふたたア。(言ったじゃないか) (久米・『ク』)
- 〈タン〉・按摩なら、あんまと言うがよかたん (いいじゃないか)  
(重八・『ク』)
- 〈テエ〉・瓦「ア、そふ物言<sup>け</sup>佐嘉<sup>の</sup>町のもんどんから笑はる、テへ (笑われるよ)  
(瓦多右衛門・『一寸見た夢物語』)
- 〈ダア〉・面白ひ名所計見てよかろふだア (いいだろうよ)  
(重八・『伊勢道中不案内記』)
- ・金とんもいつとつろふだア (言っているのだろうね) (銀作・『ク』)
- 〈デエ〉・子添姥 (こせんほふ) の手洗ふたもんどんぢやろふでへ。  
(手を洗ったものでもあろうよ) (重八・『ク』)

### 3.2 明治期

明治期の長崎方言を写す資料として、『唐人船』を参照する。本作は、明治15年生まれの平山蘆江が長崎で過ごした少年時代を描いた自伝的小説である。ここではタイ、タナ、タンも加えて前時代よりもバリエーションが増え、さらにタイナ、タイナン、タイノ、タイノウ、タイノウシと、タイに別の終助詞を下接した形も多数見られた。以下、用例と共に話者と対象を括弧に入れて示す。

- 〈タイ〉 ・兄しゃまの鼻のあたまは真黒うなつとるたい (真っ黒になってるよ)  
(おあき→幸之助)
- 〈タナ〉 ・商業学校のごたるところへやるけん、こんげん事になつとたな  
(なるんじゃないか) (おつね→甚之助)
- 〈タン〉 ・さう思ひなはるとも無理はなかたん (無理はないよ)  
(宅市の祖父→幸之助)
- 〈タイナ〉 ・あ、おいくさんといふ人は、この人たいな、ふうむよか娘さんたい  
(この人なのね。ふうむ、いい娘さんだね) (叔母→アンリ)
- 〈タイナン〉 ・お前のお父しゃまも困った人たいなん (困った人だねえ)  
(宅市の母→幸之助)
- 〈タイノ〉 ・退学になるかも知れんたいの (～かもしれないじゃないか)  
(幸之助→恭太郎)
- 〈タイノウ〉 ・アンリは悪い奴たいのう (～だねえ) (宅市→幸之助)
- 〈タイノウシ〉 ・不思議なこともあるもんでございますたいのうし  
(～ございますねえ) (群衆の会話)
- 〈ダイ〉 ・三隻並うで行く事にしうだい (しょうよ) (宅市→幸之助)

〈ダイノ〉 ・ その時あ幸ちいも僕の書記官ぐらゐにしてやらうだいの  
(してやろうじゃないか) (重吉→幸之助)

### 3.3 昭和・平成期

以下は、昭和・平成期の例である。音声データ、小説、漫画の他、アンケート、聞き取りから年代順に用例を示す。

#### 3.3.1 長崎市茂木町大崎データ

本データは、1980年頃に文化庁が行った「各地方言収集緊急調査」の録音資料のうち、長崎市茂木町大崎地区の音声を長崎大学教育学部が文字に起こしたものである。また、現在国立国語研究所が構築中の「日本語諸方言コーパス」の元データでもある。話者はいずれも農業に従事する70代の男女で、ここではタア、タイ、タノの他、タイに別の終助詞が下接したタイナ、タイノ、タイネが見られた。

〈タア〉 ・ ダイブ アイビニツカッタタア (かなり歩きにくかったじゃないか)  
(男性 B)

〈タイ〉 ・ ワスレチョットタイ (忘れてるんだよ) (女性 D)

〈タノ〉 ・ コヤシデン ナンデンタノ (肥やしでも何でもだよね) (女性 D)

〈タイナ〉 ・ ウタウケンカラオケテイウトタイナ (歌うからカラオケというんだね)  
(女性 C)

〈タイノ〉 ・ ヤッパ ナガイキシタツタイノ (やっぱり長生きしたんだね)  
(女性 C)

〈タイネ〉 ・ ヤスミナシタイネ (休みなしなんだね) (男性 A)

#### 3.3.2 文芸作品

以下は、昭和、平成の文芸作品で、長崎出身者による小説や漫画から得た用例である。3.3.1の大崎データと比較してもバリエーションが極端に減り、タイとタイネの二種類しか見つけることができなかった。時代とともにタイのバリエーションが淘汰された状況を映した結果と捉えているが、それにしても衰退が急である。いずれの作品も東京の出版社から全国的に販売されたものであることを考えると、方言使用を制限した可能性も考慮に入れなければならないかもしれない。以下、用例と共に話者・作品名・発表年を括弧に入れて示す。

〈タイ〉 ・ こんげん大散歩は出来んたい。(できないよ)

(中年男性・『肥前風土記』1956年)

・そう、老後の恩給もつくし、よかでしたい。(いいじゃないですか)

(中年女性・『祭の場／ギヤマン ビードロ』1988年)

・ほうよ、今度は駿らの番たい。(駿たちの番だよ)

(祖母・『長崎乱楽坂』2004年)

・マリア様の顔ば拝みに来ただけたい(来ただけだよ)

(男子高生・『坂道のアポロン』2012年)

〈タイネ〉・生傷増えとるたいね(増えているじゃないの)

(女子高生・『坂道のアポロン』2012年)

### 3.3.3 長崎県小値賀町藪路木島方言集および聞き取り調査

『藪路木島方言集』は長崎県北松浦郡小値賀町の離島藪路木島の出身者の内省による方言集である。2017年に刊行され、13000語を取める。以下は方言集からの引用と、2019年に聞き取り調査で得た著者、古川氏の発話である。3.3.2の文芸作品と比較しても様々なバリエーションが見られた。

〈タ〉・アカハタノアガレバ シアイノ ハジマッタ(試合が始まるんだよ)

(聞き取り)

〈ター〉・ゴツツオター(ご馳走だ)

(『藪路木島方言集』)

〈タイ〉・ナンノコツツエナカッタイ(苦にする程の事ではないだろ)

(『藪路木島方言集』)

〈タナ〉・オナシタナー(同じじゃないか)

(『藪路木島方言集』)

〈タヨ〉・コゲンアッタヨ(こんなにあるのよ)

(『藪路木島方言集』)

〈タイナ〉・アッタッタイナー(あったんだったなあ)

(『藪路木島方言集』)

〈テエ〉・タシケソーテエ(確かそうだったよ)

(『藪路木島方言集』)

〈ダー〉・ニギヤカニ ナロダー(賑やかになるだろう)

(聞き取り)

〈ダヨ〉・オナシジャロダヨ(同じだろうね)

(聞き取り)

### 3.3.4 長崎大学学生アンケート結果

2017年に長崎大学教育学部学生にアンケート調査を行った。質問内容は以下の例文にあてはまる形式をそれぞれ(a タイ b タン c タナ)から選び、その他の形がある場合は( )に記入を求めるというものである。その際に、自分では使わないが聞いたことがあるという語形も自由に記述してもらった。

- 1 「お前が寝坊したけん、間に合わんやったと（ ）。どげんしてくれ  
るとや。」
- 2 (子どもを叱る妻に)「そげん責めんでもよか（ ）。許してやらん  
ね。」

それぞれ、「お前が寝過ごしたから間に合わなかったんだよ。どうしてくれるんだ」「そんなに責めなくてもいいじゃないの。許してやりなさいよ」という意味になるように空欄を埋めることを想定した。長崎県内出身者の回答としては、例文1、2とも「a タイ」に集中し、自由記述にタイネが目立った。また、祖父母が使用する語彙としてタナ、タイノ、タイナ、タイナンを挙げた回答が複数見られた。

### 3.3.5 新上五島町方言調査

以下は、長崎県南松浦郡新上五島町で2019年に行った聞き取り調査の結果である。話者は新上五島町生え抜きの70代の女性である。タイを使用するか、他に類似の言い方はないか尋ねたところ、タイとタイデーの両形が確認できた。以下のようにいずれも準体助詞のトか名詞または推量のウに接続するようなので話者に確認したところ、トが付かない用法(例：オコラルツタイ)は非文であるという回答であった。

〈タイ〉 ・オコラルツタイ (叱られるよ)

〈タイデー〉・イッシント ヨツタイデー (いつでも寄るんだよね)

・シアイノ ハジマツタイデー (試合が始まるんだよね)

・ココニオレバ アンシンタイデー (安心だよ)

・アソンダモンタイデー (遊んだものだよ)

・アツジャロタイデー (あるんだろうね)

## 3.4 タイとそのバリエーションの分布状況のまとめ

上記の資料に見られたタン、タナなどタイのバリエーションの推移を表をまとめてみよう。表1は、今回の調査で採取できた各作品の用例数を地域と年代順に並べたものである。表を作る際、まず市街地と周辺部とに分けた。「長崎県都市部」とは比較的人口の多い市街地を指す。主に長崎市が中心であるが、『坂道のアポロン』の舞台のみ、県北の佐世保市である。また、「郡部」とは、農村地域と離島を指す。なお県内全域の語を掲載する『長崎県方言辞典』は都市部と郡部にまたがることから、後方に配置した。

表1 近世の文献に現れたタイ類の推移

	長崎県都市部											郡部			広域	佐賀県		
	1718	1796	1809	1814	文化類	1900頃	1924	1956	1975	2004	2012	2017	1980	2017	2019	1993	幕末	1867
	博多小女郎波枕	訳詞長短話	浮世風呂	東海道中膝栗毛	長崎訛	唐人船	長崎方言集覧	肥前風土記	ぎやまんビードロ	長崎乱楽坂	坂道のアポロン	長大生アンケート	国研録音テープタ茂木	葦路木島方言集	新上五島町調査	長崎県方言辞典	伊勢道中不案内記	一寸見た夢物語
タ (-)													5	○		○	13	2
タヨ							○							○				
タナ					1	13	○				△			○	○	○		
タン	1					8	○									○	5	
タノ							○						7					
タナン							○											
タネ																○		
タイ		1	3	3	5	276	○	39	9	10	9	○	72	○	○	○		
テエ (←タイ)													1	○			1	1
タイノ						2						△	10					
タイノウ						3												
タイノウシ						1												
タイナ						1						△	1	○		○		
タイナン						3						△						
タイネ											2	○	1		○			
タイロ																○		
テノウ													1					
タンナイ																○		
ダア														○			2	
ダヨ														○				
デエ																	1	
ダイ						19												
ダイノ						1												

○… 使用例あり △… 理解語彙

この表において、近世には都市部の言葉を反映したと思われる文献からタイ、タナ、タンの3種類の語形が見られ、確認できる限り1718年の「博多小女郎波枕」中の「長崎の人」が使用したタンが最も早い例であることが分かった。これら一連の形式の中で現在ではタイが主流であるが、『長崎訛』までの近世においては用例数は少ないものの、タナ、タンなど、タイ以外の形が見られた。佐賀史料ではタイに語形が似ているテエより多くタ、タンが用いられていたように、必ずしもタイだけではない。むしろターの方が盛んで、この状況は、少な

くとも近世の肥前地域ではまず、「タ」という終助詞があったのではないかと  
 わせる。前田2021で終助詞パイの成立以前に終助詞バの存在を想定し、バに別  
 の終助詞が下接してバリエーションが生まれたのではないかと述べたが、ここ  
 でも同様に終助詞タが存在し、別の終助詞イ、ナなどが下接したと考えられる  
 のではないだろうか。

その後の1900年頃のことばを映すと思われる『唐人船』にもタナ、タンが見  
 られたほか、タイノ、タイナン、タイノウなど、タイに別の助詞が接続した形  
 も多数見られた。先に示した1924年『長崎市史風俗編下巻』の「長崎方言集覧」  
 でも、タイ以外にタヨ、タナなどタを基本として別の助詞を接続したバリエー

表2 『唐人船』タイ類の話者別分布表

話者	聞き手	タナ	タン	タイ	タイノ	タイノウ	タイノウシ	タイナ	タイナン	ダイ	ダイノ	計
少年	→少年			65	2	1				3		71
	→少女			22						6		28
	→青年男性			4								4
	→青年女性			1								1
	→中年男性			2								2
	→中年女性			1								1
少女	→少年			10								10
青年男性	→少年			36						1	1	38
	→少女			1								1
	→青年男性			4						2		6
	→中年男性			4								4
	→中年女性			12						1		13
青年女性	→少年			3						1		4
中年男性	→少年	1		20						4		25
	→少女			3					2			5
	→青年男性			5								5
	→中年男性			19								19
	→中年女性			5								5
	→老年			2								2
中年女性	→少年	10	3	15				1	1	2		32
	→少女											0
	→青年男性		1	6								7
	→中年男性			1								1
	→中年女性			6								6
老年男性	→少年	2	4	9								15
	→中年男性			1								1
その他	群衆同士			17		2	1					20
	計	13	8	274	2	3	1	1	3	20	1	326

ション形が5種類も掲載されており、これらはタから派生した語であることが窺える。古賀の「長崎方言集覧」にタイノ、タイノウシが見られないのは、当該箇所が方言辞書の性格の部立であるため、基本形タイのバリエーションと捉え、項目としては挙げなかったのではないかと考えている。1956年『肥前風土記』以降の小説類ではほとんどタイ一種類のみで、バリエーションの衰退が窺えたが、郡部と位置づけた茂木、上五島、藪路木島（小値賀町）の調査や長大生のアンケートから、それ以前には見られないタイネや、タイの縮約形と思われるテにノウの付いた新たな形も確認できた。

表2は『唐人船』のタイのバリエーションの使用例を、話者の年代別に並べた上で、それぞれ聞き手の年代別に分類したものである。これを見ると、タイの使用頻度が最も高く、タナ、タンは中年以上の人の発話で、特に少年または青年など、年下に対する時に偏って見られた。また、タイノ、タイノウ、タイノウシなどは前の時代に見られなかった語形であるが、若年層同士や火事現場の野次馬の会話などで見られた。このことから、タイノ、タイノウは気の置けない友達同士や、群衆の噂話などで使用され、若者語のようになっただけなことばである可能性が高い。この傾向も、バイとそのバリエーションについて分析した前田2021の結果と類似する。バイにもバン・バナ・バイノ・バイノウシなど多くのバリエーションが文献で確認できたが、最も使用頻度の高いのはバイで、バナ、バン、パノは、年長者から年少者への発話にあらわれた。また、バイノ、バイノウシは若年層同士で使われていた。

表3は近世期から現代までのタイとそのバリエーションの時代的推移を示したものである。

表3 タイの出現形と用法の時代的推移 ※太字は用例数の多い語形を表す

時代	バイ類の出現形	用法
近世期	(タ)、タイ、タナ、タン	基本形タ+助詞
明治30年頃	タイ、タナ、タン、 <b>タイノ</b> 、 <b>タイノウ</b> 、 <b>タイノウシ</b> 、 <b>タイナ</b> 、 <b>タイナン</b>	↓
大正末期	タイ、タナ、タン、 <b>タヨ</b> 、 <b>タノ</b> 、 <b>タナン</b>	
昭和後期	タイ、	
平成以降	タイ、(タナ) (タイノ) (タイナ) (タイナン)、 <b>タイネ</b>	基本形タイ+助詞

以上から、タとそのバリエーションの発達過程について、次のようにまとめられる。

- 1 近世のタン、タイ、タナは終助詞タに別の終助詞が接続したものと分析で

き、明治30年頃の『唐人船』以降に見られるタイノ、タイノウシ、タイナンなどはタイに更に終助詞が接続したものと分析できる。また、タイの使用頻度の上昇に伴って、基本形がタからタイに代わったと考える。

- 2 『唐人船』はタイが広く用いられる一方で、タナ、タンは目下に優しく言う表現であった。また、タイナ、タイノは若い人に偏るなどの傾向があり、一連のタイのバリエーションに待遇表現的な使い分けが見られた。

#### 4 タイの成立について

タ（タイ）はどこから来たのだろうか。同じ終助詞で語形がバイと類似していることからしばしば一緒に論じられるタイであるが、バイとの違いは何なのか。前田2021で筆者はバイは中央語の終助詞ワが語源になっていると考えたが、タイはどうだろうか。

次に、タイの語源を論じたものを紹介し、考察する。

##### 4.1 語源説の提示

タイの語源説としては以下の4つが管見に入った。以下、引用する。なお、各説の名称と引用箇所の下線は本稿の筆者による。

<トイウワイ説>

○松尾捨治郎1936『国語法論攷』

九州辺のばいもはいを濁った者であるが、同じ九州にたいといふ方言があるのも、といふはい、とはい、たい、となったもので、足利期、徳川期にも見えて居る。

さうであらうと思ふたい。(狂言記・烏帽子)

べらばい、手拭が落ちたい。(浮世風呂前)

但し後のたいはたはいの略であるから、連用形の下に附いて居るので、九州方言のたいが、終止連体形の下に附くのととは、意義もやゝ違ふ。九州方言ならば落ちたたいといふ筈である。

<トワイ説>

○林田明1962「大村方言の助詞」

次に、「トヨ」の異形と思われる「タイ」およびその系統があげられる。<sup>(註3)</sup>

○上村孝二1967「天草南部方言覚書」

ところが最近になって、トワイ（良カトワイ）がもとで、タイが成立したと考えるようになった。(中略)ともかくこれらのターは、私見ではト

に詠嘆のワがついたものだ。(中略)私見は、トワイが一度に縮まってタイができたとする。

○藤原与一1986『方言文末詞〈文末助詞〉の研究(下)』

「タイ」に、九州方言にいちじるしい、準体助詞系の「ト」文末詞の内在するらしいことは、想察にかたくない。 — 「タイ」の中に「ト」の要素とでも言いたいものがある。

○神部泰宏1992『九州方言の表現論的研究』

「タイ」の起源については、なお問題があるにしても、上述の「ト」の、比較的原初的な用法を示すかとみられる天草のような現象のうえに、何らかの要素が加わって成立していったとみることは、いなめないものと思われる。

<テアル説>

○永田直行1854『菊池俗言考』

タヒは<sup>テアル</sup>而在ノ約 歌ノトジメニ云フランノ詞ハ<sup>テム</sup>而將<sub>L</sub>在ノ約ニテ本同語ナカラ遣サマニヨリテ雅俗分ル、ナリ

<アタ説>

○藤本憲信2002『熊本県菊池方言の文法』

タイはタ+イである。タとイをそれぞれ分析することによって、タイの本性が捉えられるであろう。タは語源を求めようとしても、なかなかその正体を現そうとしない。

人カル探シテモラオウバカルセンデ、自分デ探スタ。

このタはどこから来たのか。一説に、タは対称代名詞アタという。アタは共通語アナタである。アータが短音化してアタとなったもの。動詞のあとに間投助詞、あるいは終助詞として加えられたアタが、動詞の語尾と同化して、タとなったという。

## 4.2 各説の比較

上記の通り、先学の説を<トイウワイ説><トワイ説><テアル説><アタ説>と名付けて示したが、<トイウワイ説>は、タイが「といふはい、とはい、たい、となったもので」あるとして、狂言や戯作から根拠を示そうとするが、現代のタイとは意義が違ふとし、結論には至っていない。<トワイ説>は、九州方言の準体助詞トに終助詞ワイが下接した後、音変化してタイになったという説である。最も支持されている説であるが、これも神部1992で「タイの起源

については、なお問題がある」と指摘するように、まだ決着を見ていない。また、この説の根拠とされる天草方言トワイについて、天草方言話者である有働駒雄氏の『天草の方言』には、

…トワイ …のだ イカットワイ（行かれるのだ） オルガストワイ  
（私がするのだ）

とあり、ノダ文であることが分かる。因みに、ワイの類語バエ（バイ）についても、

…トバエ …のだよ ハシットバエ（走るのだよ）

と、やはりノダ文の訳が付けられている。他方でタイおよびそのバリエーションに関しては、

…タイ …よ ヨカタイ（いいよ） コンキモンガ イツクシカタイ（此の着物が美しいよ）

…タ 希望、断定、確定を表す動詞の連用形につく場合

ワルガ イカントナロ オルガ イコタ（お前が行かないなら私  
が行こう〈希望〉～この場合私が行くんだと断定の場合もある

動詞の終止形（連体形）につく場合

オルガ イクタ（私が行くよ〈希望〉〈断定確定〉 オルガトルタ  
〈希望断定確定〉）他に言う場合はワルガイクタ（お前が行くがよ  
い〈希望〉〈断定確定〉お前が行け〈命令〉）

とあるほか、形容詞や名詞に付く「タイ」<sup>(注5)</sup>、「ダ」<sup>(注6)</sup>「ダナ」も同様に、希望、断定、確定を表すと説明されノダ文ではない。このことから筆者は〈トワイ説〉の根拠となった天草方言トワイはタイとは異なるのではないかと考えている。

では次に、〈テアル説〉について考える。この説は江戸末期のものであるが、永田直行はタイについて、テアルが縮まって成立したと説明する。そして和歌のトジメ（文末）に使う「らむ」は元々「～であらむ」と約まった語であるとしていることから、古典文法における完了の助動詞タリを經由してタイとなったと考えているようである。すると、以下の2点が問題となる。

- ① 完了タリは連用形接続なのに対し、方言タイは名詞や用言の終止連体形に接続する。
- ② タリは完了の助動詞であるが、タイは確認要求や同意を促すなどの意味に用いられる。

このことから、意味、接続ともに直結しないので、連用形接続のタリを語源とするには無理がある。

最後に、〈アタ説〉を見る。藤本氏はタイをタ+イと分析され、タの語源をアナタが短音化してアタとなり、動詞の語尾と同化したものとされる。確かに、語尾に付いたアナタが終助詞化したとされる方言は他にもあるが、<sup>(注7)</sup>根拠となる用例は見つかっていないようで、今のところ判断する術がない。

以上、様々な説を考察する中で、まだタイについては検討の余地があることが分かった。そして、従来指摘されていないようであるが、タイの語感の強さや体言に接続すること、語形が似ていることから体言接続の助動詞タリの可能性に考えが至ったので、以下、検討してみたい。

## 5 タリ説の検証

まず、体言接続のタリについて、辞書の記述を引用する。

たり 解説・用例〔助動〕(活用は「たら・たり・たり・たる・たれ・たれ」(ラ変型活用)。体言に付く。格助詞「と」に動詞「あり」の接した「とあり」の変化した語)

断定の助動詞。事物の資格をはっきりとさし示す意を表わす。…である。

\*西大寺本金光明最勝王経平安初期点〔830頃〕七「現の閻羅の長姉たりと、常に青色の野蚕の衣を著たり」(中略) \*史記抄〔1477〕一〇・呉太伯世家「兄弟次第に迭に君たらうと云たぞ」 \*天草本伊曾保物語〔1593〕イソポの生涯の事「Nantaru (ナンタル) トコロニ ウマレタ モノゾ」(中略) 語誌

(1) 断定の「たり」の原形と見られる「とあり」の形の例には、次のようなものがある。「汝、前生(ぜんしゃう)を可知し。汝、前生に黒き色の牛と有りき」(今昔物語一四・二〇)。

(2) 断定の「たり」は平安朝の和文にはほとんど例がなく、漢文訓読文にもっぱら用いられた。中世以後は和漢混交文、抄物などに現われるが、室町中期以後はまれになり、江戸時代にかけて「何たる」のような複合語の用例に限定されて行く。なお江戸前期の上方文学では、「何たる」のほかに「親たる人」のように、身分を表わす名詞に付くものがほとんどである。ただし明治以後の文語文にはまた例が見え始める。「内閣は、法律の定めるところにより、その首長たる内閣総理大臣及びその他の國務大臣でこれを組織する」〔日本国憲法一六六条〕など。(後略)

(『日本国語大辞典第二版』小学館)

辞書の記述から、時代により上接する語に変化があるようである。これを確認するために体言接続タリの用例を、文献で確認してみる。国立国語研究所「日

本語歴史コーパス」の上代から中世末までの古典作品をオンライン検索ツール「中納言」で検索してみたところ、120例のデータがヒットした。検索対象は巻末の通りである。以下に用例と共に作品名及び上接語の区分を括弧に入れて示す。

- 文集の、蕭々たる暗雨窓を打つ声といふところをよめる  
(『後拾遺和歌集』1015番詞書 形状詞)
- 寺の内の僧等、年の内の営として法服を調へて、請僧たり。公家には勅使を遣して音楽を奏して行はせ給ふ。  
(『今昔物語集』 人+タリ)
- 右の手しては、前に矢筈の荒作りたるが、二三十ばかりあるを取りて  
(『宇治拾遺物語』 人以外+タリ)
- 峰は鳥路たり、麓は蹊たり。人跡歩み絶えて独りそびけあがる。  
(『海道記』 人以外+タリ)
- 「この仰せいかが。かの歌、全く劣るべからず。しかれども、古今の歌たるによりて、限りありて、まづ任大臣候はむに、  
(『十訓抄』 会話文 人以外+タリ)
- 俄かに西の風激しゅう吹いて頼まれた義教緒方が船たる船共いづくの浦へか吹き寄せつらう、行き方知らずに成った。  
(『天草版平家物語』 人以外+タリ)
- されば一ねん三ぜんの機をもつて、三千人の衆徒を置、仏法今に繁盛たり。  
(『虎明本狂言集』 夷大黒 会話文 形状詞)
- 真に何たる威勢位の有る人をも陰では悪戯者は謗らいで適わぬ物なれども、  
(『天草版平家物語』 何+タリ)

用例を見てみると、『後拾遺和歌集』の「蕭々たる」のように漢語にタリがついて状態を表す「形状詞」の例が最も早く、次に『今昔物語集』の人格語にタリが下接する「請僧タリ」が見られた。次の『宇治拾遺物語』では「矢筈の荒作り(矢の幹を荒く作ったもの)」という一般名詞にタリが使われるようになっている。

これらをまとめたのが表4である。年代順に、全データの用例数を上接する語別に整理した。表からも明らかなように、上代、中古の和文資料には例が少なく、『海道記』『十訓抄』『とはずがたり』など鎌倉時代の作品と『虎明本狂言集』と『天草本平家物語』『天草版伊曾保物語』に多数確認できた。「形状詞」は『後拾遺和歌集』以降室町末期まで見られた。また、人を表す名詞に接続する例は『今昔物語集』以降継続して現れ、人以外の名詞に接続する用例も室町末期まで現れており、これらのタリが形状詞、人格語、一般名詞へと用法を広

表4 タリの出現例 (国立国語研究所『日本語歴史コーパス』より中納言検索結果)

		形状詞		人格語			一般名詞			何+	計
		たり	たる	たら	たり	たる	たら	たり	たる	たる	
後拾遺和歌集	1087		1								1
今昔物語集	1100				3	5					8
新古今集	1205		1			1					2
方丈記	1212					1					1
宇治拾遺物語	1220								1		1
海道記	1223	9	5	1			1	3	3		22
東関紀行	1242	2									2
十訓抄	1252	2		1	12	5		1	1		22
とはずがたり	1306	1	4		2	2					9
徒然草	1336							1			1
天草版平家	1592		4	5					1	24	34
天草版伊曾保	1593								1	5	6
虎明本狂言集	1642	1	5			1		2	2		11
計		14	20	7	17	15	1	8	9	29	120

げた様子が窺えた。さらに、室町末期には、「何たる（何という）」という感嘆表現の例が集中して出現した。

以上の結果から、名詞接続タリが『宇治拾遺物語』以降、一般名詞に接続する用法を獲得する様子が確認できた。室町時代以降、口語において終止連体形の合一現象により終止形はタルになっていくが、九州においては用言の語末の母音が [kuru] > [kur] > [ku?] (来る→来っ) のように促音化する現象がしばしば起こることから考えると、タルがタの形に音変化したとしても不自然ではない。それが3.4で述べた近世の方言終助詞タなのではないかと想定している。

意味的側面から見ても、タイは終助詞の中でも断定的な響きを持つ。冒頭で述べたように、バイが単に思ったことを述べる言い方であるのに対し、タイは念を押す表現である。これも断定タリが元となっていると考え、自然である。

体言接続のタリがタイの語源だとすると、接続も体言接続から連体形(終止形)接続に用法を広げていったと考えるほうが自然である。本稿3.1.1から3.3.5までに挙げた用例はほぼそのどちらかであったが、発達過程を追えるほどの用例数は集められなかった。しかし、現代の地理的な方言分布に目を向けると、体言から用言の終止連体形へと接続が広がったのではないかと思わせる事象があった。

それは、都市部と離島での用法の違いである。長崎市内では用言の終止形に直接タイが付く用法がごく普通に使われる一方で、藪路木島および新上五島町では、これは使えないという<sup>(注9)</sup>。「ナカタイ」は非文で、「ナンノコツツエナカツ(ト)タイ(何ということはないじゃないの)」「オコラルットタイ(叱られるだろうよ)」のように、準体助詞のトを入れれば文として成り立つという。周辺地域に古い用法が残りやすいという一般的な方言分布を考えると、用言に直接付かない藪路木島や新上五島町のタイの用法がより古い形だということになるだろう。そうだとすると、この現象は体言接続タリとのつながりを見いだす根拠とはならないだろうか。これについては、今後さらに詳しく調査したいと考えている。

## おわりに

以上、本稿では、長崎方言終助詞のタイの変遷過程について考察した。タイの語源については、十分とは言えない根拠を組み合わせる一案を示したものである。今後、様々な方面からの調査が進み、実態が解明できれば幸いである。

- (注1) 前田桂子(2021)「長崎方言の終助詞バイの変遷について——近世近代の長崎史料を中心に——」『筑紫語学論叢Ⅲ』風間書房
- (注2) 九州方言の終助詞バイについても、中世末期頃に中央語のワから方言バが発生し、さらに別の終助詞オ、イ、ヨなどを接続してバイ、バイ、バヨ、バナなどの形ができたことを確認した。また、長崎県内の都市部においてはバイの優勢により、バヨ、バナなどは衰退し、昭和以降に新たにバイナ、バイネができ、まだ使用されていることも確認できた(「長崎方言の終助詞バイの変遷について——近世近代の長崎史料を中心に——」『筑紫語学論叢Ⅲ』)。
- (注3) この後にタイ、ター、テー、デ、ダイを挙げて説明している。
- (注4) 本文中、神部氏は熊本市周辺のトが問いの表現に使用されやすい傾向にあるのに対し、天草では ソッデ ヨカトー(それでいいさ)、イツデン キテ ヨカトー(いつでも来ていいさ)、ドケー イッタトー(どこへ行ったの?)を挙げ、疑問文だけでなく自由に使われる用法の広さを指摘している。
- (注5) イコダ(行こう) イロダ(射ろう) ススモダ(進もう)…略…を例示している。
- (注6) ダナは「イコダナ(行こう、行くよ)イクダナとはいわない ソルガ ヨカッドダナ(それがよいでしょう)ヨカッダナとはいわない」と説明されている。
- (注7) 例えば、山口県東部に今も残るノンタは、「ノウ、アナタ(ねえ、あなた)」が約まったものと言われる(有元光彦編『山口県のことば』明治書院 p.143)。
- (注8) 例えば、長崎方言でも伝統的に拍の促音化が起こる。坂口至1998『長崎県のことば』p.11には、「県下全域で、動詞語尾の「ル」が促音化する。例：クッ(来る)、スッ(する)、カンガユッ(考える)」とある。

(注9) 本稿3.3.3および3.3.5の聞き取り調査の際に情報を得たので確認したところ、両者とも同様の回答であった。

(調査資料)

- 〈近世長崎史料〉近松門左衛門(1718)「博多小女郎浪枕」『近松浄瑠璃集 上』日本古典文学大系49／野口文龍(1797)『長崎歳時記』(長崎縣史編纂委員会『長崎県史 史料編四』昭和43年)／中岡益(1814)『瓊浦通』(長崎歴史文化博物館福田文庫蔵)草稿本／打橋竹雲(化政期頃)『長崎訛』(『長崎市史風俗編下巻』／高宮泰峨(1851)『長崎萬歳』(丹羽勘漢吉校注『長崎文献叢書第二輯』第4巻長崎文献社1976年)／案間坊暮成(1867)『洒落滑稽一寸みた夢物語』(吉町義雄「滑稽洒落一寸みた夢物語」『文学研究52』九州文學會 1932)／一返舎十九『伊勢道中不案内記』(『佐賀県近世史料』第9編 佐賀県立図書館近世資料編さん室)
- 〈明治以降の文献〉古賀十二郎(1924)『長崎市史風俗編下巻』／長崎市茂木町大崎データ(仮称)／平山蘆江(1925)『唐人船』／田中千禾夫(1956)『肥前風土記』／林京子(1988)『祭の場／ギヤマン ビードロ』／吉田修一(2004)『長崎乱楽坂』／児玉ユキ(2012)『坂道のアポロン』／古川初義(2017)『長崎県小値賀町藪路島方言集』
- 〈日本語歴史コーパス検索対象〉万葉集、続日本紀、竹取物語、古今和歌集、伊勢物語、土佐日記、大和物語、平中物語、蜻蛉日記、落窪物語、枕草子、源氏物語、和泉式部日記、紫式部日記、堤中納言日記、更級日記、大鏡、讃岐典侍日記、今昔物語、方丈記、宇治拾遺物語、十訓抄、徒然草、海道記、建礼門院右京大夫集、東関紀行、十六夜日記、とはずがたり、虎明本狂言集、天草版伊曾保物語、天草版平家物語

(参考文献)

- 越谷吾山(1775)『物類称呼』(佐藤武義ほか(1998)『近世方言辞書集成』第3巻 大空社)／永田直行(1854)『菊池俗言考』(佐藤武義ほか(1999)『近世方言辞書』港の人)／松尾捨治郎(1936)『国語論攷』文学社／林田明(1962)「大村方言の助詞」千葉大学文学部編文学科学紀要4号／上村孝二(1967)「天草南部方言覚書」薩摩路11号／愛宕八郎康隆(1976)「肥前長崎地方の準体助詞『ト』について」長崎大学教育学部人文科学科研究報告第25号／上野智子(1978)「長崎県西彼杵半島方言の文末詞」国文学攷76号／有働駒雄(1980)「天草の方言」／愛宕八郎康隆(1984)「長崎方言文末詞推移考——平山蘆江『唐人船』を方言資料として——」長崎大学教育学部人文科学研究報告三三／藤原与一(1986)『方言文末詞〈文末助詞〉の研究(下)』春陽堂／奥村三雄編(1989)『九州方言の史的研究』桜楓社／山崎久之(1990)『続国語待遇表現体系の研究』／神部泰宏(1992)『九州方言の表現論的研究』和泉書院(第二節 肥筑方言における「バイ」「タイ」文末詞の生態と表現特性)／原田章之進編(1993)『長崎県方言辞典』風間書房／篠崎久躬(1997)『長崎方言の歴史的研究—江戸時代の長崎語—』長崎文献社／坂口至(1998)『長崎県のことば』(日本のことばシリーズ 編者代表平山輝夫)明治書院／藤本憲信(2002)『熊本県菊池方言の文法』熊本日日新聞情報文化センター／北原保雄(2003)『日本国語大辞典第二版』小学館／神部宏泰(2007)『方言の論理』和泉書院／前田桂子(2021)「長崎方言の終助詞バイの変遷について——近世近代の長崎史料を中心に——」『筑紫語学論叢Ⅲ』風間書房
- \*本研究は科学研究費基盤(c)17K02781の助成を受けています。

(まえだ けいこ・長崎大学教育学部教授)